

1

解説

(1) $F(x)=2x^3+3x^2$ のとき

$$f(x)=F'(x)=6x^2+6x=6x(x+1)$$

$F'(x)=0$ とすると $x=0, -1$

$F(x)$ の増減表は右のようになる。

よって、 $F(x)$ は $x=-1$ で極大値をとる。

また、 $G'(x)=f(x)$ であるから

$$\begin{aligned} G(x) &= \int f(x)dx = \int (6x^2+6x)dx \\ &= 2x^3+3x^2+C \quad (C \text{ は積分定数}) \dots\dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

と表される。

$G'(x)=F'(x)=6x(x+1)$ であるから、 $G(x)$ の増減表は、 $F(x)$ と同じく右のようになる。

よって、 $G(x)$ は $x=0$ で極小値をとる。

さらに、条件より、 $G(x)$ は $x=k$ で極大値0

をとるから、 $k=-1$ であり $G(-1)=0$

これと①から $2 \cdot (-1)^3 + 3 \cdot (-1)^2 + C = 0$

ゆえに $C = -1$

(2) (i) $F(x)$ が $x=0$ で極小値をとることと、 $F'(x)=f(x)$ から、

$$F'(0)=f(0)=0$$

であり、 $x=0$ の前後で $F'(x)$ すなわち $f(x)$ の符号は負から正に変わる。 (サ ②)

$G(x)$ が $x=k$ で極大値をとることと、 $G'(x)=f(x)$ から、

$$G'(k)=f(k)=0$$

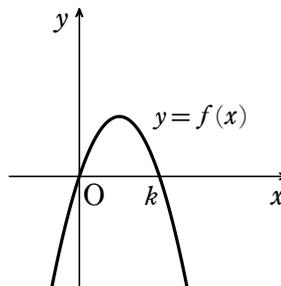
であり、 $x=k$ の前後で $G'(x)$ すなわち $f(x)$ の符号は正から負に変わる。 (ス ①)

さらに、 $f(x)$ は2次関数であり、 $k>0$ であるから、 $y=f(x)$ のグラフは右の図のようになる。

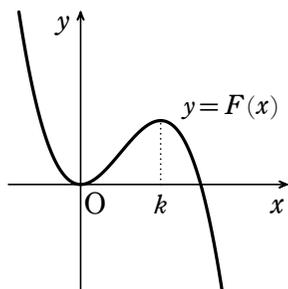
$F'(x)$ すなわち $f(x)$ の符号の変化に注意して、

$F(x)$ の増減表をかくと、次のようになる。

x	...	0	...	k	...
$F'(x)$	-	0	+	0	-
$F(x)$	↘	極小	↗	極大	↘



条件より, $F(0)=0$ であるから, $y=F(x)$ のグラフの概形は右の図のようになる。 (㉞ ㉟)



(ii) $F(0)=0$, $F'(x)=f(x)$ であるから, すべての実数 x に対して

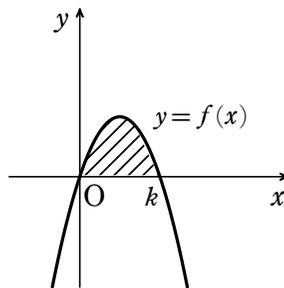
$$F(x) - F(0) = \int_0^x F'(t) dt = \int_0^x f(t) dt \quad (\text{㉟ ㊱}, \text{㊲ ㊳})$$

これと (i) の考察により, $F(x)$ の極大値は $F(k) = \int_0^k f(t) dt$ (㉜ ㊴, ㊵ ㊶)

ここで, 定積分 $\int_0^k f(t) dt$ は, 右の図の斜線部分の面積と等しい。

よって, $F(x)$ の極大値は, 関数 $y=f(x)$ のグラフと x 軸で囲まれた図形の面積と等しいことがわかる。

(㉜ ㊴, ㊵ ㊶)



また, $G'(x)=F'(x)$ であるから, $G(x)$ の増減表は, $F(x)$ と同じく次のようになる。

x	...	0	...	k	...
$G'(x)$	-	0	+	0	-
$G(x)$	↘	極小	↗	極大	↘

さらに, 条件より, $G(k)=0$ であるから, すべての実数 x に対して

$$G(x) - G(k) = \int_k^x G'(t) dt = \int_k^x f(t) dt$$

よって, $F(x)$ の極大値は $F(k) = \int_0^k f(t) dt = - \int_k^0 f(t) dt = -G(0)$

$G(0)$ は $G(x)$ の極小値であるから, $F(x)$ の極大値は, $G(x)$ の極小値の -1 倍と等しい。 (㉟ ㊱)

別解 $F'(x)=G'(x)=f(x)$ であるから, $F(x)$ と $G(x)$ はともに $f(x)$ の原始関数で,
 $G(x) = F(x) + C$ (C は積分定数)

と表される。

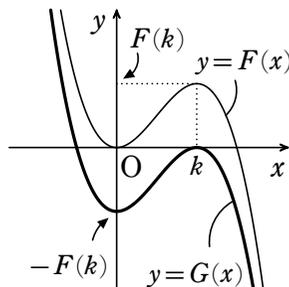
このとき, $G(k) = F(k) + C$ であり, $G(k) = 0$ であるから $C = -F(k)$

よって $G(x) = F(x) - F(k)$

ゆえに, $y=G(x)$ のグラフは, $y=F(x)$ のグラフを y 軸方向に $-F(k)$ だけ平行移動したものであり, 右の図の太線部分のようになる。

したがって, $G(x)$ の極小値は $-F(k)$ であるから,

$F(x)$ の極大値は, $G(x)$ の極小値の -1 倍と等しい。 (㉟ ㊱)



2

解説

$$(1) |\vec{AB}|^2 = |\vec{OB} - \vec{OA}|^2 = |\vec{OB}|^2 - 2\vec{OB} \cdot \vec{OA} + |\vec{OA}|^2 = 5^2 - 2 \times 1 + (\sqrt{13})^2 = 36$$

$$|\vec{AB}| \geq 0 \text{ であるから } |\vec{AB}| = 6$$

よって、線分 AB の長さは 6

$$(2) \text{ 直線 OH は平面 ABC に垂直であるから } \vec{OH} \perp \vec{AB}, \vec{OH} \perp \vec{AC}$$

$$\text{よって } \vec{OH} \cdot \vec{AB} = 0, \vec{OH} \cdot \vec{AC} = 0$$

$$\text{ここで } |\vec{AC}|^2 = |\vec{OC} - \vec{OA}|^2 = |\vec{OC}|^2 - 2\vec{OC} \cdot \vec{OA} + |\vec{OA}|^2$$

$$= 5^2 - 2 \times 1 + (\sqrt{13})^2 = 36$$

$$\vec{OA} \cdot \vec{AB} = \vec{OA} \cdot (\vec{OB} - \vec{OA}) = \vec{OA} \cdot \vec{OB} - |\vec{OA}|^2$$

$$= 1 - (\sqrt{13})^2 = -12$$

$$\vec{OA} \cdot \vec{AC} = \vec{OA} \cdot (\vec{OC} - \vec{OA}) = \vec{OA} \cdot \vec{OC} - |\vec{OA}|^2$$

$$= 1 - (\sqrt{13})^2 = -12$$

$$\vec{AB} \cdot \vec{AC} = (\vec{OB} - \vec{OA}) \cdot (\vec{OC} - \vec{OA})$$

$$= |\vec{OA}|^2 - \vec{OA} \cdot \vec{OB} - \vec{OA} \cdot \vec{OC} + \vec{OB} \cdot \vec{OC}$$

$$= (\sqrt{13})^2 - 1 - 1 + (-11) = 0$$

$$\text{よって } \vec{OH} \cdot \vec{AB} = (\vec{OA} + s\vec{AB} + t\vec{AC}) \cdot \vec{AB} = \vec{OA} \cdot \vec{AB} + s|\vec{AB}|^2 + t\vec{AB} \cdot \vec{AC}$$

$$= -12 + s \times 36 + t \times 0 = -12 + 36s$$

$$\vec{OH} \cdot \vec{AC} = (\vec{OA} + s\vec{AB} + t\vec{AC}) \cdot \vec{AC} = \vec{OA} \cdot \vec{AC} + s\vec{AB} \cdot \vec{AC} + t|\vec{AC}|^2$$

$$= -12 + s \times 0 + t \times 36 = -12 + 36t$$

$$\text{ゆえに } -12 + 36s = 0, -12 + 36t = 0$$

$$\text{したがって } s = \frac{1}{3}, t = \frac{1}{3}$$

$$(3) (2) \text{ より, } \vec{AB} \cdot \vec{AC} = 0 \text{ であるから } \angle BAC = 90^\circ$$

$$\text{また, } |\vec{AC}|^2 = 36 \text{ であり, } |\vec{AC}| \geq 0 \text{ であるから } |\vec{AC}| = 6$$

よって、 $\triangle ABC$ の面積を S とすると

$$S = \frac{1}{2} |\vec{AB}| |\vec{AC}| = \frac{1}{2} \times 6 \times 6 = 18$$

さらに、(2) より $\vec{AH} = \frac{1}{3}\vec{AB} + \frac{1}{3}\vec{AC}$ であるから

$$|\vec{AH}|^2 = \left| \frac{1}{3}\vec{AB} + \frac{1}{3}\vec{AC} \right|^2 = \frac{1}{9} |\vec{AB}|^2 + \frac{2}{9} \vec{AB} \cdot \vec{AC} + \frac{1}{9} |\vec{AC}|^2$$

$$= \frac{1}{9} \times 36 + \frac{2}{9} \times 0 + \frac{1}{9} \times 36 = 8$$

$\triangle OAH$ は $\angle OHA = 90^\circ$ の直角三角形であるから

$$OH = \sqrt{OA^2 - AH^2} = \sqrt{(\sqrt{13})^2 - 8} = \sqrt{5}$$

$$\text{したがって、四面体 OABC の体積は } \frac{1}{3} S |\vec{OH}| = \frac{1}{3} \times 18 \times \sqrt{5} = 6\sqrt{5}$$

別解 (2) から、OH の長さは次のように求めてもよい。

$$\begin{aligned} |\vec{OH}|^2 &= \left| \vec{OA} + \frac{1}{3}\vec{AB} + \frac{1}{3}\vec{AC} \right|^2 \\ &= |\vec{OA}|^2 + \frac{1}{9}|\vec{AB}|^2 + \frac{1}{9}|\vec{AC}|^2 \\ &\quad + \frac{2}{3}\vec{OA} \cdot \vec{AB} + \frac{2}{3}\vec{OA} \cdot \vec{AC} + \frac{2}{9}\vec{AB} \cdot \vec{AC} \\ &= (\sqrt{13})^2 + \frac{1}{9} \times 36 + \frac{1}{9} \times 36 + \frac{2}{3} \times (-12) + \frac{2}{3} \times (-12) + \frac{2}{9} \times 0 \\ &= 5 \end{aligned}$$

$$|\vec{OH}| \geq 0 \text{ であるから } |\vec{OH}| = \sqrt{5}$$

3

解説

$x^5 - 1 = (x-1)(x^4 + x^3 + x^2 + x + 1)$ であるから

$$\begin{aligned} x^{2023} - 1 &= x^3(x^{2020} - 1) + x^3 - 1 \\ &= x^3(x^5 - 1)(x^{2015} + x^{2010} + \dots + x^5 + 1) + x^3 - 1 \\ &= x^3(x-1)(x^4 + x^3 + x^2 + x + 1) \times (x^{2015} + x^{2010} + \dots + x^5 + 1) + x^3 - 1 \end{aligned}$$

よって、求める余りは $x^3 - 1$

4

解説

(1) Y が 5 で割り切れるための条件は、 X_1, X_2, \dots, X_n のうち少なくとも 1 個は 5 であることである。

$$\text{よって、求める確率は } 1 - \left(\frac{5}{6}\right)^n$$

(2) Y が 15 で割り切れないための条件は、

Y が 3 で割り切れない または Y が 5 で割り切れないである。

$$Y \text{ が 3 で割り切れない確率は } \left(\frac{2}{3}\right)^n$$

$$Y \text{ が 5 で割り切れない確率は } \left(\frac{5}{6}\right)^n$$

$$Y \text{ が 3 でも 5 でも割り切れない確率は } \left(\frac{1}{2}\right)^n$$

$$\text{よって、求める確率は } 1 - \left(\frac{2}{3}\right)^n - \left(\frac{5}{6}\right)^n + \left(\frac{1}{2}\right)^n$$

5

解説

(1) $\vec{OC} = 2\vec{OA} + \vec{OB}$, $\vec{OD} = \vec{OA} + 2\vec{OB}$ とおく。

このとき、 $\vec{OA} + \vec{OB} = \frac{1}{3}(\vec{OC} + \vec{OD})$ であるから、与えられた条件より

$$\begin{cases} |\vec{OC}| = 1 & \dots\dots ① \\ |\vec{OD}| = 1 & \dots\dots ② \\ \vec{OC} \cdot \frac{1}{3}(\vec{OC} + \vec{OD}) = \frac{1}{3} & \dots\dots ③ \end{cases}$$

③ から $|\vec{OC}|^2 + \vec{OC} \cdot \vec{OD} = 1$

これと ① から $1^2 + \vec{OC} \cdot \vec{OD} = 1$

よって $\vec{OC} \cdot \vec{OD} = 0$

したがって $(2\vec{OA} + \vec{OB}) \cdot (\vec{OA} + 2\vec{OB}) = 0$

(2) 与えられた条件から

$$\begin{cases} \left| \vec{OP} - \frac{1}{3}(\vec{OC} + \vec{OD}) \right| \leq \frac{1}{3} & \dots\dots ④ \\ \vec{OP} \cdot \vec{OC} \leq \frac{1}{3} & \dots\dots ⑤ \end{cases}$$

(1) より $\vec{OC} \cdot \vec{OD} = 0$ であり、 $\vec{OC} \neq \vec{0}$ かつ $\vec{OD} \neq \vec{0}$ であるから $\vec{OC} \perp \vec{OD}$

このことと、①、② から、O を原点とする座標平面において

$$\vec{OC} = (1, 0), \vec{OD} = (0, 1)$$

とおくことができる。

$\vec{OP} = (x, y)$ とすると

$$\vec{OP} - \frac{1}{3}(\vec{OC} + \vec{OD}) = \left(x - \frac{1}{3}, y - \frac{1}{3}\right), \vec{OP} \cdot \vec{OC} = x$$

よって、④、⑤ から

$$\begin{cases} \left(x - \frac{1}{3}\right)^2 + \left(y - \frac{1}{3}\right)^2 \leq \frac{1}{9} \\ x \leq \frac{1}{3} \end{cases}$$

したがって、点 P の動く範囲は図の斜線部分である。

ただし、境界線を含む。

よって、 $|\vec{OP}|$ が最大となるのは $P\left(\frac{1}{3}, \frac{2}{3}\right)$ の

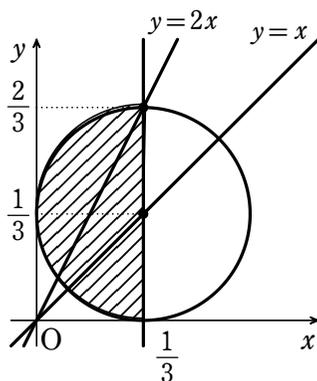
ときで、このとき

$$|\vec{OP}| = \sqrt{\left(\frac{1}{3}\right)^2 + \left(\frac{2}{3}\right)^2} = \frac{\sqrt{5}}{3}$$

$|\vec{OP}|$ が最小となるのは、P が半円

$$\left(x - \frac{1}{3}\right)^2 + \left(y - \frac{1}{3}\right)^2 = \frac{1}{9}, x \leq \frac{1}{3} \text{ と直線 } y = x$$

の交点となるときで、このとき



$$|\vec{OP}| = \sqrt{\left(\frac{1}{3}\right)^2 + \left(\frac{1}{3}\right)^2} - \frac{1}{3} = \frac{\sqrt{2}-1}{3}$$

よって、 $|\vec{OP}|$ の最大値は $\frac{\sqrt{5}}{3}$ ，最小値は $\frac{\sqrt{2}-1}{3}$